

令和五年度入学試験問題

国語

(教員養成課程)

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまでは、この問題冊子を開かないこと。
- 2 問題冊子は表紙を含めて一〇ページです。
- 3 解答用紙は六枚、下書き用紙は二枚あります。
- 4 解答は指定された解答欄に記入すること。
- 5 受験番号は解答用紙の全ての指定欄に横書きで記入すること。
- 6 解答は縦書きとし、指定された字数にまとめること。句読点や括弧記号等も、一字分とします。
- 7 解答用紙のみを提出し、問題冊子・下書き用紙は試験終了後、持ち帰ること。なお、いかなる理由があっても、解答用紙以外(下書き用紙など)は受理しません。
- 8 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等により交換を必要とする場合は、手を挙げて監督者に知らせること。

問題 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

美しい風景と聞くと、どんなものを想像するであろうか。目に映る自然の様子や景物を思い浮かべる人が多かるう。「風景」という語は、古くから中国で使われていた。『大漢和辞典』によれば、「風景」の使用は、『晋書』羊祜伝「祜樂山水、每風景、必造峴山、置酒言詠、終日不倦。祜山水を樂しみ、風景毎に、必ず峴山に造り、置酒言詠し、終日倦まず。」に遡る。湖北省の峴山で、山水を樂しみ風景をむさぼり、酒を置き詩を詠み、一日いても退屈しない悠々自適な様子が描かれている。ここで用いられた「風景」は、山水という目に映る風光や景物であると同時に、空中に動いている大気（風）や刻々に変化している光、ひざし、影（景）という形のないものも指すと考えられる。では、和語の「けしき」はどうであろうか。『日本国語大辞典』（第二版）では、「けしき（気色）」について、「自然界の有様。目にうつる情景から感じられるけしき。物の様子。」と説明し、『続日本紀』や『徒然草』などにおける用例を挙げている。篠田治美（二〇一二）は、「心あらむ人に見せばや津の国の難波わたりの春のけしきを」（後拾遺集 能因法師）における「けしき」の意味について、次のように述べている。

「けしき」は自然の景物を指すだけではない。古語の「けしき」は「気色」である。まさしく「気」の「色」。辞書によれば、「気」とは天気間を満たし宇宙を構成する基本と考えられるもの、生命の原動力となる勢い、そして心の動きである。「色」は様子、情趣を意味する。自然のたたずまいである景色、そこにある生命のエネルギー、それらから感じ取る気分や気持ち、それが「けしき」である。見えるものとしての「景色」と感じられたものとしての「気色」、天地自然の「景色」と人の心の「気色」である。

和語の「けしき」と漢語の「風景」は、両方とも目に映るものと、目に見えず体や心で感じ取るものとを内包している。日本と中国では、それぞれのようにして「けしき」と「風景」を感じ取り、自然観や美意識を培ってきたのであろうか。

ここでは、まず、和歌と漢詩における四季折々の歌、とりわけ五感で味わう「けしき」と「風景」の歌に着目して、右の問いの答えを探ってみる。次に、両者の比較を通して、古くから中国文化の影響を強く受けつつも、独自の文化を生み出し、開花させてきた日本文化の精髓について考える。（中略）

高階秀爾（二〇一五）は、古代ギリシャの彫刻作品などに見られる西洋の「実体の美」と対照的に、日本では「古池や蛙飛びこむ水の音」春は曙、やうやうしろくなりゆく山ぎはすこしあかりて……に代表される「状況の美」が好まれる、と指摘している。実体の美は状況の変化に左右されず、いつでも

どこでも「美」であり得るが、水の音や春の曙のような状況の美は、長く続かずすぐに消えてしまう。そういった移ろいやすくはかないものを味わうのも日本の美意識の重要な特色の一つで、「わび・さび」と名づけられている。

自然の景色の中で、日本人は満月や満開の桜といった完璧な状態を嫌い、欠けている三日月や花の蕾つぼみまたは散り行く桜を好む。*4 ドナルド・キーン（一九九九）は、その理由について「これから出て来るものを暗示する『初め』、あるいは今過ぎ去ったばかりのものを暗示する『終わり』は、詩の読者、能の観客、あるいは水墨画の愛好家が、実際に見える事実を飛び越えて、極限にまで想像力を広げてゆく余地を許すのである。」と分析し、日本的な「暗示の美」を論じている。近世日本水墨画を代表する名画「松林図」（長谷川等伯）は、精緻な描写を意図的に回避し、さまざまな白や空白を用いることで、見る側に広々とした想像の空間を与えている。この「余白の美」もまた日本の美意識の特徴の一つで、景色の不在によって多くの存在が喚起されている。

このような状況の美、暗示の美、余白の美を楽しむ趣向は、和歌の世界においてもよく現れている。*5 篠田は、万葉集から新古今和歌集までの四季の歌を俯瞰し、和歌の特徴について次のように述べている。

和歌は世界を見ない。「見る」のではなく、聞く、触れる、嗅ぐ。視覚ではなく聴覚、触覚、嗅覚また味覚で世界を受けとめる。感受する人と感受されるモノが、主体と客体としてあるのでなく、感受するモノのなかに人がいる。人のなかにそれが入り込んでいる。

和歌は多く夕暮れや夜を詠い、薄明、薄暮を好む。見えないものを身体で受けとめ、共振する。その中に住まい、包まれ抱かれる。絵の浮かぶ歌は多いが、それらもまた、こちらからあちらを見るといふ客観的な世界ではなく、そのなかに歌人が、人が、「私」がいる、と感じられる。人間が景色を見るのではなく、景色のなかに人間がいる。匂い、風、音などを感じるるとき、身と世界が距離をとって立つのではなく、一体としてある。

和歌では、人と自然が渾然B一体となるため、五感で受けとめやすい。あるいは、五感で受けとめているからこそ、一体としてある。和歌には明確な主語が登場しない。これは日本人にとっては当然のことであるが、主語の使用が必須である英語話者にとっては、理解し難いものである。西洋では人の外に自然があつて、主観世界と客観世界が明確に区別されているからである。

ここで、*4 四季折々の歌を通して、和歌の特徴を具体的に見てみよう。

（春）

さくら花ちりぬるかぜのなごりには水なき空に浪なみ

A

たちける

（古今集

紀貫之きのつらゆき）

〈夏〉

五月待つ花たちほな橘たちほなの香をかげば昔の人の袖の香
B する (古今集 よみ人しらず)

〈秋〉

見わたせば花も紅葉もなかりけり浦のとまやの秋の夕暮 (新古今集 藤原定家)

〈冬〉

駒とめて袖うちらはらふかげもなしさのわたりの雪の夕暮 (新古今集 藤原定家)

〈春〉の歌は、最初の勅撰和歌集『古今和歌集』を編纂した紀貫之の名作である。桜の花が散ってしまった風の名残には、水のない空に白い余波(なごり)が立っている。「桜と波の見立て」としてよく知られるこの歌には、見えるものは空っぽの「空」だけしかない。(中略)「海」という言葉は使わなくても、「波が立つ」という表現によって、大空に舞い散るマボロシの花びらが波立つ景色が読者の脳裏に浮かび上がってくる。この歌は、まさに景色を五感で感じ取り想像を膨らませ、状況の美、暗示の美、余白の美を同時に味わえる傑作と言えよう。

〈夏〉の歌は、五月を待つて咲く橘の花の香りを嗅ぐと、昔、馴染み深かったあの人の袖(にたきしめられていた香)のにおいがする、と詠んでいる。『万葉集』には香りを詠う歌は非常に少なく、嗅覚的な美の自立は『古今集』からという。(中略)平安朝の詩人たちは、嗅覚の刺激が過去を呼び戻すことに関心をそそられていた。それは当時における新しい主題の一つであった。この歌においても、目に見えないものに思いを膨らませ、感性的な美が研ぎ澄まされている。

〈秋〉の歌は、『百人一首』を編纂した藤原定家の名歌である。見わたす限り、春の美しい花も秋のきれいな紅葉もない、海辺の粗末な漁師の小屋(苦屋)だけで、ひっそりとした色のない秋の夕暮れ。この歌の魅力について、篠田は「浦を眺望する」というのは『万葉集』以来の伝統だというが、言葉として海辺でも浜辺でもなく浦である。浦とは、海と陸地の接する水際・『浦』であり、また『裏』である。現実世界という表に対する裏、心である。眼前の世界は、苦で屋根をふいた粗末な小屋、みすばらしいものがあるだけである。だが、そのみすばらしさを見据えるとき、己が心の内に何かが見え始める。ほんとうに求める美や理想が見え始める。」と解説している。定家が求めるほんとうの美とは何か。答えは定家の中にあり、読者の心の中にある。そもそも浦には花や紅葉などはないはずである。それまで見出されることのなかった美しいものを、独創的な視点で追求しようとする定家の美意識は、名画「松林図」に通じるものがある。

〈冬〉の歌は、馬をとめて、袖(に積もった雪)を払い落とすような物影すらない、佐野の渡し場の雪の夕暮れ、と詠んでいる。この歌は、「苦しくも降

りくる雨かみわの崎さののわたりに家もあらなくに」(万葉集 長忌寸奥麻呂)を本歌とする。もとの歌では、雨宿りする家もなく、旅の寂しさ苦しさを詠っているが、定家の歌では、薄闇に包まれた雪一面の銀世界に点景となる駒(馬)の人がいるだけである。一見白と黒の静止画のように見えるが、駒の人という動的要素が用意されている。駒の人がこちらに向かつて駆けてくるのか。それとも後ろ向きで姿が小さくなってゆき消えてしまうのか。前向きの場合、少しずつ見えてくる顔にどのような表情を浮かべているのか。また後ろ姿の場合、薄闇に包まれながら次第に遠ざかって銀世界に消えるときに、私たちはどのような思いに包まれるであろうか。駒の人は、前述のキーンが指摘した「これから出て来るものを暗示する『初め』」の役割を果たしている。歌枕「さののわたり」は「家なし」で、雪と夕暮れという設定は旅先の孤独、憂愁を暗示している。しかし、この歌は旅人の孤独や愁いを詠んだだけではない。読者が駒の人に呼び寄せられ、自ら歌の世界に入り込んでいく。そして、旅人に各々の人生や境遇を投影しながら、それぞれの心の風景を膨らませるのである。

ここまで、四季折々の歌を通して、和歌の特徴やそこから見えてきた日本の美意識について考察した。次に、漢詩を通して中国の自然観や美意識について考える。

中国では、最初に自然を詠んだ歌は二世紀ころに作られた「帰田の賦」(張衡)であるとされる。二世紀から三世紀にかけて、戦乱や政治のフハイに疲弊した人々は自然を見つめてそれを歌にする動きが次第に増えていき、五世紀の初めに陶淵明がかの有名な「帰去来の辞」を詠んだ。唐代には王維が陶淵明の流れを受けて、一つの世界を築き上げ、その王維の影響の下に、それ以後の詩人たちがさまざまな工夫をしいた。これが中国の自然を詠う詩の流れである。

ここで、まず陶淵明作とされる五言古詩を通して、古代中国の自然観と美意識を見てみよう。

四時歌 四時の歌

春水満四沢 春水 四沢に満ち

夏雲多奇峰 夏雲 奇峰多し

秋月揚明輝 秋月 明輝を揚げ

冬嶺秀孤松 冬嶺 孤松秀づ

春は水だ。雪解け水が四方の沢地に満ち満ちて、春の生き生きとした生命のほとばしりを感じさせる。夏は雲だ。夏の入道雲がすばらしい峰を形づくる。秋は月だ。明るく輝く満月が空高くかかっている。冬は松だ。すべての葉が落ちている冬の嶺に目立つのは、すくと立つ松の秀でた姿である。こ

の歌では、春夏秋冬のそれぞれの季節における最も典型的な情景が取り上げられている。満ち溢れる水、立派な形の雲、明るく輝く満月、寒さに負けない一本松。素朴な情景でありながら、どれも生命力がみなぎって、欠けることなく厳然とした理想的な姿である。この詩における中国の美意識は前述の日本の美意識と対照的なものとなっている。

しかし、中国の山水画、水墨画を眺めると、右の美意識と異なる側面を窺うことができる。日本の名画「松林図」も、中国絵画の精華と称される南宋の水墨画から多大なる影響を受け、その神髄を引き継いでいることから、中国と日本の美意識に重なる部分が存在すると考えられる。水墨画だけではない。漢詩からも日本の美意識と重なる部分が見て取れる。ここでは、そのような四季折々の漢詩を取り上げて考察する。なお、紙面の都合上、漢詩の書き下し文を略す。

〈春〉

春暁 孟浩然
春眠不觉晓
处处闻啼鸟
夜来风雨声
花落知多少

〈夏〉

山亭夏日 高骈
绿树阴浓夏日长
楼台倒影入池塘
水精帘动微风起
满架蔷薇一院香

〈秋〉

秋風引 劉禹錫
何處秋風至
蕭蕭送雁群
朝來入庭樹
孤客最先聞

〈冬〉

江雪 柳宗元
千山鳥飛絕
萬徑人蹤滅
孤舟蓑笠翁
獨釣寒江雪

「春暁」は、春の心地よい朝の情景を詠った佳作である。まだ完全に目覚めていない状態の中で、鳥の鳴き声という聴覚の刺激を受け、昨夜の風や雨の音が耳によみがえる。その春の嵐によって、庭の花がどのくらい散ってしまったらうかと連想し、その余韻が漂う。この詩に詠まれた風景は、視覚から得た情報がなく、すべて聴覚によって連想されたものである。そこには、過ぎ去ってゆく春を惜しむ「惜春」の情もあるが、隠者の生活を送り自然をこよなく愛する作者がうつらうつらとしている状態の中で晩春の光景を愛でて楽しんでる姿も目に映る。

「山亭夏日」は、夏の日の静寂を詠った詩である。夏の強い日射しの下にできた緑樹の「陰」、波立つことなく静かな水面に映った高殿の「影」。実体のない「陰」と「影」を通じて夏の風景を連想させる。転句では、水晶のすだれを動かす涼しげなそよ風を描き、結句では、中庭一面に広がる馥郁たる薔薇の花の香りを通じて棚いっぱい咲く夏の美しい情景を思い起こさせる。前半の「静」から後半の「動」へという転換があったが、後半の二句も前半と同様に実体のないもの（風「香」）が用いられ、全体的に五感によって夏の風景が詠まれている。

「秋風引」は、「蕭蕭」「孤客」という言葉通り、一人旅を続ける者が感じた秋のものの寂しさを詠った詩である。「蕭蕭」は風の音の擬音語として多用されている。「秋風引」のほかに、例えば、「史記」刺客列伝における荊軻の名言「風蕭蕭兮水寒、壯士一去兮不復還」。(風蕭蕭として易水寒し、

。)[がよく知られている。一方、李白の「送友人」の尾聯「揮手自茲去、蕭蕭班馬鳴」(手を揮つて茲より去れば、蕭蕭として班馬鳴く。)[における「蕭蕭」は馬の鳴き声を表す擬音語である。「蕭蕭」は擬音語だけでなく、「風が寂しく吹くようす」「馬が寂しげに鳴くようす」といったように、状態を表す擬態語でもある。「蕭」は茎が細長く葉の小さい草の名。細長いイメージからひっそりとしたさま、もの寂しいさまを表すようになった。「秋風引」では、もの寂しげに吹く秋風に作者の心境が重ねられている。その聴覚による連想は「春曉」の表現手法と異曲同工である。

「江雪」は、雪景色を詠った詩である。前半の二句は遠景で、「千山」「万径」という大きな数で無限の自然を表現し、「絶」「滅」という語で鋭く対比させている。雪によってすべてが覆われ、生物の気配を感じさせない厳しい環境の中で、ぼつんと一つの舟が川に浮かび、その舟の上でただ一人の老人が寒々とした雪の中で釣りをしている。後半の二句は近景で、「孤」「独」という印象的な語に、サセンされているいまの作者の心境が表出されている。一方、雪によって命あるものの存在がすべて許されない状況の中で、一人の老人が泰然と釣りをしている姿が、作者の誇りや屈しない精神の現れとも読み取れる。この詩の何もない雪景色とじつと動かない老人の姿に作者の心象風景がギョウシユクされている。

これらの漢詩のように、中国においても、目で風景を見るのではなく、人が自然の中に入り込み、聴覚、嗅覚、触覚など五感によって風景を感じ取り、感じ取った風景に自分の心境を投影し、そこに余韻や余情をカモシ出し、象徴的感性的なものを獲得していく、という美意識が存在している。ただし、五感を通して象徴的感性的な風景を生み出しつつも、漢詩の題目による詩趣の方向づけや「秋風引」「江雪」の「孤」「独」といった直接的な表現も見られる。(中略)

花咲く、花散る、風吹く、雪舞うなど四季折々の景色を目で、鼻で、耳で、肌で感じ取り季節の移ろいを味わい、各々の思いを寄せる。日本も中国も似たようなツールで自然を楽しむ側面がある。一方、同じ「花散る」でも、日本では青空に向かって満開する桜の景色を思い浮かべるが、中国では雨露に濡れた花びらが庭に散り敷き、地面を彩る風景を連想する。和歌はかな文字のごとく、柔らかくて流動的で、情緒的で漠然とした表現を多く用いる。漢詩は漢字のごとく厳然とした形を持ち、感性的で具体的な表現を好む。和歌の掛詞「雪」「浦」は、読者の想像力がなければ、「行き」「裏」に変換できない。それに対し、漢詩における「孤」「独」「絶」「滅」「蕭蕭」はストレートにその意味を伝えてくる。

「風景」と「けしき」、あたりまえに使っている言葉の背後には、中国文化と日本文化の生成や発展、両国文化の交流の歴史が隠されている。ここで取り上げた和歌と漢詩の数々の名作もまた、古典教育の定番教材として長年採録されてきたものである。このように、日本と中国の自然観・美意識に光を当

問一 二重傍線部 a ~ e のカタカナを漢字で書きなさい。(四点×五＝二〇点)

問二 傍線部 A「悠々自適」、B「渾然一体」の意味をそれぞれ書きなさい。(五点×二＝一〇点)

問三 傍線部①「心あらむ人に見せばや」を現代語に訳しなさい。(一〇点)

問四 傍線部②「西洋の「実体の美」」がありますが、これと対照されている日本の美には、どのような特徴がありますか。三五字以内で説明しなさい。(一五点)

問五 傍線部③「新古今和歌集」について、次の語句をすべて用いて、四〇字以上五〇字以内で説明しなさい。(一五点)

勅撰和歌集

後鳥羽院

八代集

問六 傍線部④「四季折々の歌」とありますが、「四季折々の歌」に共通する特徴について、本文に即して二五字以上三五字以内で説明しなさい。(二〇点)

問七 〈春〉、〈夏〉の和歌について、次の問いに答えなさい。(一〇点)

(一) 波線部「ぬる」を次の例にならって、文法的に説明しなさい。(五点)

(例) 花も紅葉もなかり^①けり^②

①ク活用の形容詞「なし」の連用形 / ②詠嘆の助動詞「けり」の終止形

(二) 空欄 A・B に共通して当てはまるものを、次の選択肢ア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。(五点)

アこそ

イぞ

ウは

エも

問八 傍線部⑤「何処秋風至」を現代語に訳しなさい。(一〇点)

問九 傍線部⑥「壮士一去兮不復還」を書き下し文にしなさい。なお「一」は「一(ひと)たび」と訓じます。(一〇点)

問十 傍線部⑦「尾聯」とは何か、説明しなさい。(一〇点)

問十一 傍線部⑧「聴覚、嗅覚、触覚など五感によって風景を感じ取り、感じ取った風景に自分の心境を投影し」とありますが、これはどのようなことを表しますか。「春暁」を例にして、六〇字以上八〇字以内で具体的に説明しなさい。(二〇点)

問十二 傍線部⑨「電子機器の普及やICTの発展に伴って、視覚情報が増える一方である。情報だけでなく、知識や理論、思考まで可視化されるようになり、分かりやすくなった反面、大切なものが失われつつあるようにも思われる。」とありますが、この意見について、あなたはどのように考えますか。具体例を挙げながら、二四〇字以上三〇〇字以内で述べなさい。(五〇点)